

が介護の点数化の手続きであるならば、新生会は全人格的ケアが基本姿勢です。

——その理念を実現、深化させるためには何が必要とお考えですか。

原 私は、すべてのことには哲学が必要だと思います。福祉も人間を相手にする仕事だから、人間哲学が必要。そういうものをないがしろにして制度の枠に人をはめ込んでいくようでは、世の中はだめになってしまいます。制度より必要なのはコンセプトです。私の仕事にしても私に哲学があり、コンセプトを持っているから、建物も美しくしているし、働いている人も生き生きしているのだと思っています。人間が輝くということ、とても大事。一人ひとりの人間が輝いていけば、世の中は絶対によくなる。

——一人ひとりが「世の光」になれば、世の中は輝く。

原 ここにある彫刻、この作品名が「地の塩」「世の光」なんです。三谷慎さんという作家に私が依頼したんですが、この彫刻が表しているのは「内面に向かい合う自分」と「外へ向かって開いていく自分」。人には二つの側面があります。内的には深く、外に向かつては明るくという意味を込めて創ってくださった作品

に、私が聖書からタイトルをつけました。

私がめざすのはクリエイティブティ、創造性です。創造的に生きることは、美しく生きること。無からの創造という少し大げさですが、自分で自分のものをつくり上げていく。私が父の仕事を継いだ時、ここは父が始めた施設ではあつたけれども、私はそこへ自分のオリジナリティを積み上げていこうとしました。自分がその仕事に意味を感じて創造的に働いてこそ、よいものができるのではないのでしょうか。

——「福祉の芸術化」ということもおっしゃっていますね。

原 「福祉の文化」「福祉の芸術化」は私のコンセプトです。それを物理的、社会的、精神的という三つの面において実現していく。「福祉と芸術がどう結びつくの？」と驚かれますが、そういう人は精神的にもを考えようと思いません。思考パターンが硬直して、ちよつと飛び出たところで発想転換することができないのかもしれない。

私は84年、ヨーロッパへ老人ホームの建築と環境を視察しにいったのですが、そこでは福祉が文化となり、芸術が生活に溶け込んでいることを実感しました。

どんどん学生運動に入っていました。みんなが世の中のことを真剣に考えた時代でしたね。社会に対して自分はどう生きるのかなど、学生の意識レベルが高かった。これは同志社に限りませんが、今の大学はどんどんきれいになって洗練されたけれども、管理化されて、人間の声

が聞こえてこない。人間の輝きが感じられませんか。人間の魂、パッションがどんどん無くなってきていると感じます。

——同志社で特に影響を受けた人物は。原 湯浅八郎先生です。たまたま私の父と懇意だったため、入学にあたり在京保証人をお願いしました。アメリカ生活を長く経験された素敵なジェントルマンで、月に一度くらい私を呼んでくださり、夜の10時頃まで話をよく聞いてくださいました。私の学生運動を否定することもなかったです。湯浅先生のいとこで、同志社女子大学で人間学を教えておられた福原春代先生にもお世話になりました。学生生活の最後はお宅に下宿していました。もちろん住谷先生にもお世話になりました。皆さん、私をかわいがるだけでなく、評価してくださったことが心に残ります。私が体当たりしながら実践し理論化していく過程を誇りに思ってくださいました。

帰国後、私の中でごく自然に「福祉・文化・芸術」と「クリエイティブに生き、生活し、仕事すること」が重なり合った

んです。これに「愛を基とした人間福祉」をさらに充実させることを目的として計画中なのが「HALCコミュニティセンター」の建設です。名称は「Human Art Life Care」の頭文字を取りました。

——原さんの情熱の原点はどこにあるのですか。

原 答えるのは難しいですね。どうしても情熱がふつふつと沸きあがってくるんです。私はこの世の中を、もつと活性化させたいんですね。どうすればもつと人間が住みやすくなるのか。そういうことを考え、それに向かつてチャレンジしていく精神を持った私のような人間が、もつと増えてくればいいと思います。そのためにもつと政治が変わらないといけませんけれど。

チャレンジ精神を受け止めてくれた同志社大学

——同志社時代の思い出を。

原 私が入学したのは安保闘争の3年後でした。大学には立て看板がいっぱいあつた。私も恐いもの知らずだったから、

ようです。同志社スピリットを血と肉にしていた先生方だったと思います。

——同志社の卒業生が校長を務めた共愛学園でも学んでおられますね。

原 同志社の卒業生で台湾ご出身の周再賜先生が当時は校長をしておられました。周先生は新島襄に憧れて同志社大学神学部に入った方。私の在校時代も、本当によく新島先生の話をしておられました。そうこうしているうちに私の夢もどんどん広がって、絶対に同志社以外は行かないと思うようになったんです。

ある時講堂で、周先生が壇上から降りてきて床に土下座し、先生方に対して謝ったことがあります。それから向きを変えて、今度は生徒に土下座して謝つた理由は覚えていませんが、新島先生がご自分の手を鞭で打った逸話を思い出します。私が共愛に入学した時も、舎監室の前で開襟シャツのおじさんが、生徒が脱ぎ散らかした上履きを整理していた。私はつきり用務員さんか誰かと思つたら、その人が周校長でした。子ども心に周先生のそれらの行動は衝撃的だったし、そういう出来事の数々が私の魂の肥やしになっていきました。

——読者の皆さんへ「創造的な生き方」

についてメッセージをお願いします。

原 私は「人格の創造性」というものがあると思うんです。せつかくこの世に生まれてきたのだから、目的を持ちながら自分が納得できる形で成長して、神様の元へ帰っていくときに「神様、私はこんなに立派になりましたよ」と、私は言いたいんです。成長願望です。人間はある程度苦労をしたり、ぶつかっていつたりするときに、生きる張り合いが出てきますね。共愛学園の周先生も、表向きには全然きらびやかでも何でもない人生でしたけれど、うまく行かなくなつた時に思い切ってくるつと向きを変えて、また生きていかれた。そういう、クリエイティブティの高い方でした。誰もが歴史に残るようなクリエイティブな生き方ができるとは限りませんが、歴史に残る残らな

いは関係なく、自分の人生を生きるんだという意気込みを持っていただきたい。定年などの社会的年齢と魂の年齢とは違うんだという気持ちで、いつまでもときめきを忘れず、創造的な人生を送っていただきたいと思います。

（聞き手：當村まり、2010年6月9日、有料マチュアホーム・穂和の園ロビーにて）

奥田道治さん●京都暁フットボールクラブ・ロイヤルチーム選手兼監督
スポーツを通じて社会貢献

サッカーもボランティアも 楽しむのが一番

何歳になっても体力に合わせて好きなスポーツを楽しみ、なおかつ人の役に立てる。情熱的だが、気負わない。サッカーW杯南アフリカ大会を目前に控えたある日、理想的なシルバライフを送る同志社サッカー部出身のファンタジスタ（創造的なプレーをする選手）をお訪ねしました。



おくだ みちはる

1938年、京都市生まれ。60年大学文学部文化学科美学及芸術学専攻卒業。京都市役所勤務。98年に退職、京都市駐車場公社で5年間勤務し、現在に至る。NPO法人「京都暁フットボールクラブ」で70歳以上が在籍する「ロイヤルチーム」の選手兼監督。09年は、60歳以上が参加する「ねんりんピック北海道・札幌2009」で京都市チームの監督を務め、ブロック優勝に導く。中京区で夫人、愛犬（イングリッシュ・スプリングガー・スパニエル）と共に暮らす。京都府スキー連盟参与、全日本スキー連盟より功労指導員賞を受賞。京都市ゴルフ協会事務局長。ゴルフはハンディ14。

後輩の勧めで

四半世紀ぶりにサッカーを再開

まず、サッカーとの出会いをお聞かせください。

奥田 小学校3年の時、現在立命館大学の総監督をしておられる衣川和宏さんが担任として来られ、「蹴球部」を小学校に創設されました。衣川さんに誘われて私も入部したのですが、5年生の頃に運動部全体が廃止。高校でようやく再開して、大学でもサッカーを続けることにな

りました。

サッカーの魅力とは何ですか。

奥田 第一に、手を使ってはいけなところが面白いですね。口人が関係しなからプレーするところも楽しい。そこへ最後は個人のプレーが生きてくるところが魅力的です。パスでつないだ後に、個人の能力、ひらめきがシュートを決める。そのへんが今の日本代表チームには不足しているように思いますが、オシム元代表監督が日本のサッカーを変えようとしていましたね。創造的な選手を育てよう

とするあの路線はよかったですと思いますよ。好きな選手はアルゼンチンのメッシ。個人技が素晴らしい。相手を抜いていく技術、スピードが凄いです。私もどちらかというと個人プレーが好きで、ウイングからバツクと抜いていくようなプレーを好んでいました。70代になるとフォワードからバツクに行かされたので、そういうプレーをする機会もあまりありません。そこはいくら私が監督だからといっても、そうそう好きにはさせてもらえません（笑）。

サッカーを再開されたきっかけは。

奥田 学生時代はサッカー部でウイング。35歳までは市役所でサッカーを続け実業団リーグで戦いましたが、仕事が忙しくなって長らく中断していました。60歳の時、高校、大学で同級生だったサッカー仲間から誘われたのが再開したきっかけです。30代、40代のサッカーチームは大学のOBで作るチームなど多数ありますが、京都市で60代、70代が入れるクラブは京都暁フットボールクラブしかありません。だから、サッカーをやりたい人は皆こへ集まってくる。彼の誘いがなかったら、もうサッカーを、ましてや監督などすることなどなかったと思います。

現在のサッカーとの係わり方を教えてください。

奥田 京都暁フットボールクラブのロイヤルチームで選手兼監督をしています。数年前まで女子チームの監督を2年間務めました。ロイヤルチームの試合と重なる時などはどうしてもそちらに行かざるを得ない。両立は難しかったので女子の監督は辞退させてもらいました。このクラブには、幼児から小学生の各学年、中学生、50代、60代のチーム、70歳以上のロイヤルチームに、中学生から社会人までが所属する女子チームまでがあり、

かなりの大所帯です。クラブの活動理念は「楽しいサッカー」。サッカーを通じて幅広く社会に奉仕するという趣旨から数年前、NPO法人化しました。一つのスポーツクラブがNPO法人になった例は、あまりないのではないのでしょうか。

歳以上の選手でも走りますよ。横からタックルするわけにはいきませんが（笑）。

ロイヤルチームのメンバーはどのような経験の持ち主ですか。

奥田 若い人はどうしても勝負にこだわ

奥田 さまざまです。同志社のサッカー部出身者では、70歳以上が3人、60代のチームにも4人。京都大学、教育大学、京都工芸繊維大学など多様です。どうしても大学サッカーの出身者が多いですね。若い時にサッカーの経験がなければ、なかなかついていきません。私も最初に練習試合をした時はきつくて、5分と持ちませんでしたから。

高齢者サッカーのカギは 体力面でのチームプレー

ロイヤルチームの最高齢選手は。

奥田 今は80代が2人います。チーム全体で数人が病欠中ですが、致し方ありません。年齢によってパンツの色が決まっています。70代が銀、80代が金。85歳以上がパイオレットで、90歳以上が白い鶴亀の刺繍。鶴亀のパンツは勲章ですね。90

奥田 若い人はどうしても勝負にこだわるために、無理なプレーも生まれます。我々ロイヤルチームは楽しむのが一番です。西日本OBサッカー連盟には52チーム、2000人以上が加盟していますが、モットーは「生涯現役」と「親睦第一」です。もちろん試合では頑張りますよ。エキサイトしてくると危険なシーンもあります。基本的には、勝負は別にして「今日は楽しかったね」と言えるゲームをする。それが高齢者サッカーの良い点ではないでしょうか。ただロイヤルチームともなると確固たる信念をお持ちの方が多く、試合中、怠けている人には文句が出たり、監督としてもなだめずかして続けてもらったり。実際にあまり走れない人もいる訳ですから、強引に注意することもできません。ボールを取られても深追いつけない人が多い。この年齢になると走りつばなしの人、走れない人、単純に楽しみたい人、やはり闘争本能を表に出す人などプレースタイルには開きがあります。お互いカバーし合っています。結局は好きなことをやっているのだから、

その点でまとまっていますね。

私の学生時代と比較して、今のサッカーは守り方も攻め方も全部違います。昔は守備と攻撃が完全に分かれていました。今は、中盤はいるけど全員が攻めて全員が守るサッカー。当時よりは随分動かないといけない。それを我々の年齢でやれと言われても、なかなかできない。そういうシステムを、時代の流れだからといって高齢者サッカーに取り入れるのは無理があると思いますね。流行の戦術を追うのではなく、体力的なチームプレーが重要です。そこに長年の経験が生きてきます。

——生涯スポーツとしてのサッカーについてお聞かせください。

奥田 サッカーは体が元気でなければできないスポーツです。私は健康のためにサッカーをするのではなく、好きなサッカーをするために健康に気をつけているという感じですね。週1回のサッカーの他にスキーやゴルフもしていますが、スポーツ以外では毎朝5時からと夕方の2回、犬の散歩をさせに京都御苑に出かけます。あとは妻が食事に気をつけてくれています。お酒は飲みません。たばこも1年前にやめました。それでも、私も身体を使いすぎたのか、65歳頃からひざ

の軟骨がすり減ってしまった。走れないことはないので体調に合わせて楽しんでいますが、皆さんそれでよいのではないのでしょうか。大事なことは、スポーツに限らず、何かに懸命に取り組むことが生き甲斐になるということ。私の場合は練習や試合の日が早く来ないかと、いつも心待ちにしているんです。こういう気持ちがあるから年齢を重ねても元気でいられるのだと思います。

芸術とサッカーを愛する ファンタジスタ

——同志社大学ではどのように過ごされましたか。

奥田 美芸専攻を選んだのは、私は商学部や経済学部というのは、ちよつと苦手でしたので。絵を描くのは好きで、今もアクリル画を描いたり、愛犬の姿を刺繍で描いたりしています。卒論は「映画概論」。卒業後は映画会社へ行こうと思っていました。ある人に聞くと「映画はいずれつぶれる」と言うので市役所に入った次第です。映画会社へ行っていたらサッカーは続けなかつたと思います。

——サッカー部では、よく練習しました。しかし当時は毎日の練習を見てくれるコ

ーチがいなかった。同志社スポーツは自主性を尊ぶとよく言われますが、コーチがないので自主的にせざるを得ないという側面もあるのでは。だから関東の大学にはどうしてもかなわない。私の入部時は関西3位でしたが、徐々に落ちてきて3年次で2部に陥落。1部に復帰できたのは私の卒業後でした。サッカー部の仲間とは今でも付き合いますが、練習は1時頃から始まったので授業にはあまり出ず、先生と親しくなる機会は少なかつたですね。その点はちよつと残念です。

——同志社で4年間を送られて、心に残っていることはありますか。

奥田 非常に自由でした。自由すぎて何をすればいいのかわからないという人もいたでしょうが、我々運動部の者は練習があつたので、迷うということはなかつたです。今の大学は学生に手厚いと聞きますが、あまり手厚くても自主性が育たないのではないのでしょうか。今は体育会のクラブに入らずに自由にスポーツを楽しむ学生も多いようです。縛られてサッカーをするのは嫌なのかな。

——アートとサッカーとの間に何か共通点がありますか。

奥田 どちらも創造的であるということ

が基本ですね。絵は自分の好きなように描く。サッカーも同じです。

人のお世話に生き甲斐を見出す スポーツボランティア

——スキーやゴルフを通じて、さまざまな社会貢献をしておられます。

奥田 スキーは個人スポーツなので、サッカーとはまた違う楽しさがあります。スピードも出るし、個人が努力すれば成果がそのまま現れるところにやり甲斐がある。25歳で始めて、上達したいならクラブに入ることを勧められました。たまたま入ったクラブが技術向上に熱心だったので、級を上げるうちに31歳で指導員の資格を取得したんです。33歳頃から京都府スキー連盟の理事を務めさせていただきました。40代、50代はスキーに熱中しました。教育部長も経験しました。指導員を教えてまとめる仕事は楽しかつたですね。ゴルフも好きで、今も週に一度はコースに行きます。だから70歳になつても忙しい。退職後は、京都市ゴルフ協会が年2回開催する市民大会で、毎回150人くらいの参加者のお世話をさせていただいています。

——筋金入りのスポーツボランティアと

お見受けします。

奥田 私はただ楽しんでいただけです。現代の高齢者は時間的にも経済的にも余裕のある人が多いですね。対象がスポーツでなくても、ボランティア活動は生き甲斐になるし、生活の中の楽しみにになります。高齢者は身構えず、気軽にボランティア活動に参加されたいかがでしょうか。

——近年言われる「健康寿命」について、スポーツを通じたメッセージをお願いします。

奥田 歳を取ってからでも、何か自分に合うスポーツを続けておられた方がいいと思います。クラブに入るとかは別にしてね。スポーツジムでもいい。何かしていれば必ず健康づくりに役立つし、健康でいられれば、また他の何かを楽しむ自信がつく。一人でジムに通つても自分のモチベーションが下がれば行かなくなつてしまうので、仲間がいるといいですね。ただ、定年退職してから新しいことを始めようと計画している方もおられると思いますが、その時にスポーツを一から始めるのはなかなか難しいです。それまでに助走期間があつた方がいい。自分の好きなものがある程度やっておき、定年になつた時にさらに深めるように計画して

おいた方がいいと思います。

——サッカー、ゴルフ、スキー。一つを選ぶとしたら。

奥田 やはりサッカー。監督もしているので、簡単に辞めるわけにはいきません(笑)。チームに迷惑をかけない限り、走れる間はサッカーを楽しみたいです。

——最後に、同志社サッカーにエールをお願いします。

奥田 もっと厳しいサッカーをしてほしいですね。右向け右と言われて従う選手はよその大学にはいますが、同志社サッカーにそれはそぐわない。それが同志社の良さでもあります。OBとしてはちよつと歯がゆい。上手だが、ハングリィさに欠ける。今は同志社にもJリーグの下部組織の選手が随分入ってきています。本当に強い選手は大学に行かず、高校からJリーグへ行きますね。でも大学では、スポーツだけでは大変なものが学べます。人間の幅が広がる環境でサッカーをするのもいいのではないのでしょうか。ぜひ頑張ってください。

——本日はありがとうございました。

(聞き手：菅村まり、2010年5月31日、中京区の自宅にて)